文＝山崎　しげ子　随筆家

わらしべ長者

昔、京の都に貧しく身寄りのない若い男が住んでいた。その男が、奈良の長谷寺の観音さまのご利益で、とんとん拍子に運が開け、ついに長者になったというめでたいお話。

ある日、男は、霊験あらたかと、都で評判の長谷寺へ詣でた。参籠して二十一日目の明け方、夢に僧が現れ、「寺を出て、手に触れたものは観音さまからの戴き物と思って歩け」と告げた。

寺を出た男は、大門のあたりで転んだ。起き上がった時につかんでいたのが、一本の藁。

歩くうち、アブが顔のまわりをうるさく飛ぶ。彼はアブを捕らえ、その腰のあたりを藁でくくって持ち歩いた。

そこに京の都から来た高貴な女性の車が通り、中の幼児がそれをほしがった。アブのついた藁を渡すと、お礼にみかんを三つくれた。

次に、咽が渇いて歩けなくなった旅人に出会う。「水をくれ、死にそうだ」。男がみかんを渡すと、旅人は元気を取り戻した。お礼は布三反。

次の日、立派な馬に乗った男が通りかかったが、馬が突然、死んでしまった。男は馬を布一反と交換し、長谷寺に向かって「生き返らせて」と祈ると、馬は起きあがった。

男は、残りの二反の布で鞍と馬の餌、自分の食べ物を買った。

さて、いよいよ京の都に入るという時、忙しく遠国への旅立ちの準備をしている家があった。「この馬を買いませんか」と男が言うと、家の主人は大喜び。田一町と米少々を得た。

その田から米を収穫し、男はやがて長者になったという。

＊

平安後期の説話集『今昔物語集』などに見える有名なお話。

長谷寺は奈良時代に成立し、平安時代から現在まで、観音信仰の霊場として参詣者が絶えない。

本尊の十一面観音菩薩像は高さ約十メートル。寺は初夏を彩る華麗な牡丹で知られるが、冬は、藁囲いの中で咲く赤や薄紅、黄色の冬牡丹、寒牡丹が可憐である。

壮大な建築を誇る本堂。本尊十一面観音菩薩像は昔も今もあつい信仰を集めている。

牡丹の花で有名な長谷寺。冬に咲く牡丹も訪れる人たちの心をなごませてくれる。

写真撮影：矢野建彦氏（上下２枚とも）

長谷寺へは、近鉄大阪線長谷寺駅より約1.5km。

できるだけ公共交通機関をご利用ください。

問 長谷寺　TEL 0744・47・7001　URL www.hasedera.or.jp